

ISHINOMAKI

ポテト通信

2025

2



令和7年産の生産に向けて

令和7年産 ばれいしょ 作付けに向けて

令和7年に作付けを予定している皆さんは準備を始めていますか。

ばれいしょを栽培するうえで最も重要なポイントは**排水性**です。排水性を確保するためには、**ほ場選定**から始まり、**ほ場準備**、**排水対策**の徹底が必須となります。また、ほ場準備以外では、**種芋の浴光催芽**など、定植前後の作業スケジュールも確認しておきましょう。

1

ほ場準備と排水対策

ほ場は、降水後でも排水が良いほ場を優先して選びましょう。通常は水稻の作付けがしづらく厄介なほ場ですが、排水性が求められるばれいしょ栽培にはピッタリです。

ほ場準備や排水対策は、できる限りほ場が乾燥している間に施工しましょう。ほ場が湿っている状態でのほ場準備や排水対策は、碎土率の低下を招きやすいことや、補助暗渠の施工が不十分となる場合があります。

排水対策は明渠の施工を徹底しましょう。額縁に沿った額縁明渠と、植付後に畦の前後と両脇の明渠の二重明渠を基本とします。また、明渠から排水溝に確実に連結し、明渠に雨水を滞水させないことが重要です。



二重明渠

2

種芋準備と植付け



浴光催芽

種芋は、植付3～4週間前からハウス等で浴光催芽を行います。浴光催芽を行うことで、萌芽不良の種芋を除き、定植後の萌芽や生育の均一化、生育の促進を図ります。

植付け時は、ほ場準備の時と同様に、ほ場が適度に乾いている状態で作業することが重要です。過湿状態だと、培土が上がりにくかったり、土壌の物理性を悪

化させることにつながり、生育が抑制されます。令和6年産の作付結果から、石巻地域では4月20日頃までに植付けすることができれば、収穫まで十分に肥大することが分かっています。天気予報とほ場状況に応じて、計画的に作業しましょう。

植付け後も**適期防除**と**追肥**を心掛け、高収量を実現させましょう！



の加工用ばれいしょ栽培

カルビーグループの年間の国内ばれいしょ調達量は約37.9万t(2024年3月期)で、これは国内のばれいしょ生産量の約19%にあたります。今後も、国内でのばれいしょの安定的な調達を維持、拡大することはカルビーグループの事業展開において重要となっています。

カルビーポテト(株)は、北海道から九州まで全国で約1,700戸の生産者と契約栽培を行っています。契約者には、「より良いじゃがいもを多く育て収穫する」ことを目指し、全国の「フィールドマン」が地域に密着したサポートを行っています。栽培技術については、植付けから収穫それぞれのステージの情報や土壌分析データを基にした施肥や病害虫の防除及び翌年以降の栽培についての技術情報を提供しています。「フィールドマン」は、経験や勘だけではなく、長年にわたり収集したデータを科学的に分析し、状況に適した情報の提供により「品質と収量の両方で最高の実り」を目指しています。

宮城県では、カルビーポテト(株)が生産者と契約を始めて令和7年で23年目となります。国内の産地は、鹿児島など九州産が5月頃まで、関東産が6月～7月、8月下旬以降は北海道産が主産地となる中で、東北産は7月～8月の端境期に収穫できる産地として重要視されています。中でも宮城県は、宇都宮管内1,142haの内の約100haを担っており、生産量は2,100tになります(令和6年産)。

カルビーポテト(株)は、今後も宮城県の面積拡大を期待しており、長期的な目標として500ha、15千tの達成を目指しています。

宮城県とカルビーポテト(株)



宮城県産ばれいしょを使った製品
現在は販売を終了しています。

宮城県ぽてと生産者大会レポート

「宮城県ぽてと生産者大会」は、加工用ばれいしょの生産振興を推進するため、生産者の生産意欲及び技術力向上と生産者交流を図ることを目的にカルビーポテト(株)と宮城県が共催して毎年開催しており、今年度は令和7年1月30日に開催されました。主な内容は、カルビーグループの取組や先進事例の紹介、収量優秀者表彰でした。

1 先進地事例

佐賀県鳥栖市 (株)松隈ファームの取組

水稲との年二作で加工用ばれいしょ高収量を実現

佐賀県鳥栖市で土地利用型農業を営む(株)松隈ファームは、地域が二毛作地帯であることから水稲+加工用ばれいしょ等の年二作に取り組んでいます。

10月に水稲の収穫が終わったほ場から順次加工用ばれいしょ用のほ場づくりに着手し、11月から本格的に準備作業を進め、以降の2か月はひたすらほ場づくりに専念します。

年明け1月25日頃から種いもを植付け、用水の供給が始まる6月15日までに、加工用ばれいしょを収穫し、水田の代かき作業などを始めます。

加工用ばれいしょの基本は、「**乾いた状態でほ場の準備をすること**」で、圃場が湿っているうちに作業し始めると土の固結等で、良い結果が得られないのだそうです。

そうした努力の甲斐あって加工用ばれいしょ総面積が19haと大面積にもかかわらず、平均単収は3t/10a以上を確保しています。宮城においても水稲作付後(翌年)の加工用ばれいしょの作付の可能性を地域や法人間で話し合い、面積の拡大や高収量に向けた検討を行う価値がありそうです。

2 収量優秀者表彰式



県知事賞 (株)めぐいーと



優秀賞 (株)入沢ファーム



(株)めぐいーと川村代表

令和4年度から取り組んでいる石巻管内2法人が優良生産者表彰されました。

両社とも最初の年は収穫間際の大雨(7.19大雨)で半作となる被害を受けましたが、あきらめずに続けてきた成果が実り嬉しい受賞となりました。

来年の作付けは、(株)めぐいーとが微増の13ha、(株)入沢ファーム社は倍増の8haとなる見込みで、大規模面積での加工用ばれいしょの高収量安定生産に邁進しています。

